

年間（五十二年～五十七年の累積）の九月平均降水量は一五三ミリで、当地域としては、秋雨や雨台風の影響を受けることが少ない。

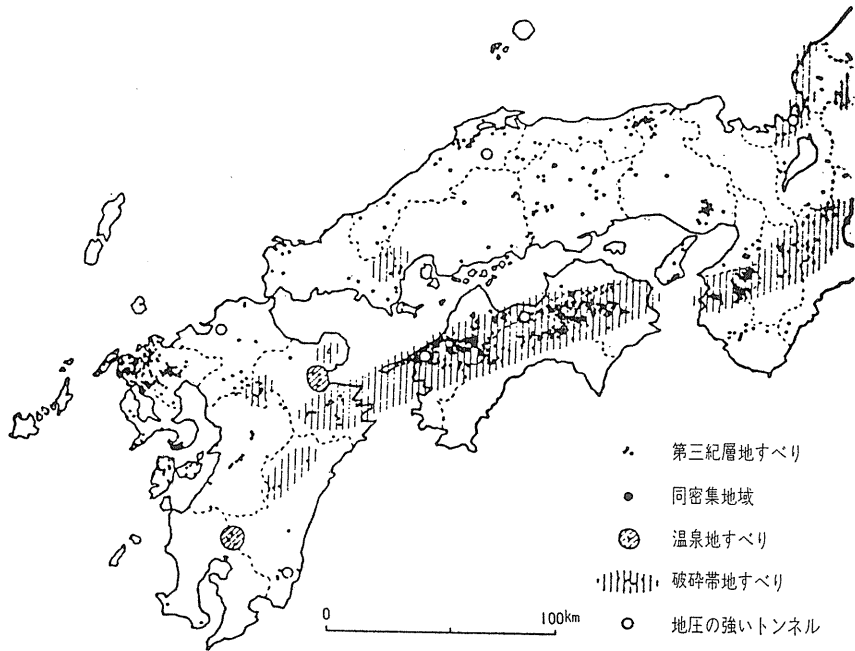
第四節 自然と災害

自然と人間は、歴史が始まって以来今日もなお、密接な関係を保っている。「恵みと災害は裏腹にある」とよく聞かすが、それだけ、人間は自然から恵みを与えてもらうことを当然のように考え、振るまい、そのことに甘んじてきた。一方では災害にあうたびに「自然」に対して怒りをあびせ、悲しみや苦しみをもって「自然」に訴え、災害から逃がれ、身を守ろうとする。人間社会から自然を切り離すことができないとすれば、当然、人間自身が災害予防に全力を尽くすべきである。

一 地すべり

地すべり（山崩れ、がけ崩れも含む）は、山地や丘陵などの斜面を構成する岩石や土壌などが大量に斜面下方に移動する現象をいう。地すべりの危険地域は、中央構造線の南側にひろがる三波川帯の地域に集中（瀬戸町も該当）している。三波川帯を構成する岩石は、緑色片岩や黒色片岩などの結晶片岩類を主としており、これらの岩石はもろく、偏平な板状あるいは基石状の岩片になりやすい。特に、黒色片岩の岩片は表面が極めてなめらかで摩擦係数がごく小さいため、非常に滑り易い状態をつくり出し出している（大久西海岸から名取海岸あたりまでが黒色片岩層である）。また、地震などのために起こることもあるが、斜面の地下に水を通しにくい層（難透水層……シルトや粘土

西南日本における地すべりの分布



（資料）小島圭二、昭和55年

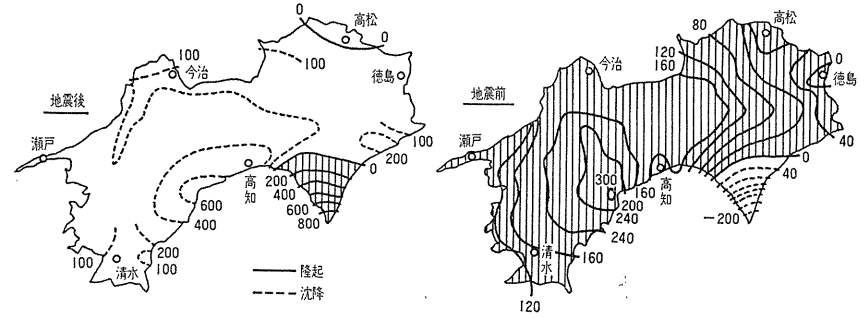
があり、その上に、水を含み易い砂礫土や岩石（透水層）などがあるとところで、降雨や融雪などのために地下水位が増加すると、粘土化し易い土は、水分を吸収し、粘着力が弱められて不透水層（非透水層……全く水を通さない。と難透水層を合わせたもの）を土台にして大量に移動する。地すべりの起こり易い斜面傾斜は、普通一五～三〇度ぐらいである。このような地すべりは、斜面が急傾斜であればあるほど、雨水や雪解水は地下に吸収されにくいので、地下水が直接の原因となって起こることが少なくない。町内には、このような条件をかかえた箇所が二〇〇ヘクタール以上の範囲にわたっており、降雨があると運動が活発化する。昭和五十五年八月の集中豪雨で国道一九七号線（塩成上集落の西方約二

と深いところで起こる地震は、深発地震といわれ、そのうちもっとも深いものは、約七〇〇キロもの深さで発生する。震源の真上の地表の点を震央といい、その分布を調べてみると、所々に寄り集まっていることがわかる。日本付近の地震は、東北地方の東側で特に頻繁に起こっている。四国南岸に震源をもつ巨大地震は、日本列島に向けて南側から移動してくるフィリピン海プレートとよばれる海底の地殻が日本列島の基盤とぶつかりあう際に生じるエネルギーによって起こるものもある。直下型地震をもひき起こす可能性がある伊予灘～日向灘に震源をもつ系列の境界は南海トラフとよばれ、この付近で南側から押しこめるフィリピン海プレートが日本列島の基盤をなす地殻の下にもぐり込みつつある。通常は、日本列島側の地殻もフィリピン海プレートに引きずられて地球内部へもぐり込む運動をしているが、陸側（日本列島側）がそのような力に耐えきれなくなると、急に反発してはね上がるような運動をする。その際に、それまでに貯えられたエネルギーが一気に放出され、巨大地震が発生し、顕著な地殻変動と津波被害を伴うのが特徴的である。地殻変動は、地球内部にある原因によって生じる地球表層部の運動すべてをいう。その運動様式はいろいろだが、地質学的時間から見れば、すべて造山運動または造陸運動という一連の過程の一部を成すものと思われる。また、両過程は、おそらく同一の原因で生じるもので、ただ地質構造の差に応じて反応のしかたに違いができたものである可能性が高い。現在、認められる運動としては、火山や地震の活動があり、特に地震は急激な土地の上昇、下降や断層を生じる。

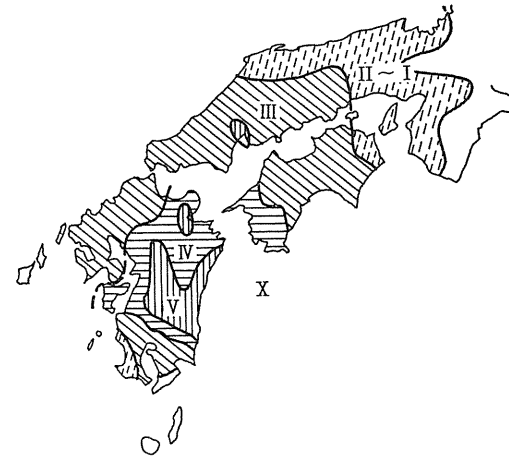
明治二十四年十月二十八日、岐阜県に起こった濃尾地震の時、大規模な地震断層ができた。この断層の両側では、上下方向で六メートル、水平方向で二メートルほども食い違いができた。これは根尾谷断層とよばれ、世界的に有名なものである。

大正十二年の関東大地震の時、三浦半島や房総半島が、二メートルほど隆起している。

昭和21年南海道地震前後における地盤の沈降
降起地域の比較（宮部原図） たて線は隆起域



1941年日向灘地震震度分布
（気象庁による）



1968年宇和島地震被害（宇佐美による）

県名	傷	家屋		茸住家被害	道路損壊	山(崖)崩れ
		全焼	一部破損			
愛媛	15	1	6	1	13	33
大分			1		2	4
計	15	1	7	1	15	37

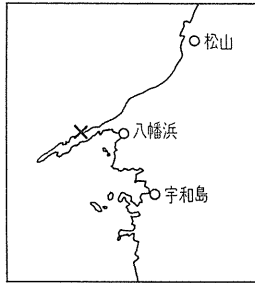
○メートル地点が寸断され、大災害をもたらした地すべりは、突然激しい運動を起こす急性型地すべりであった。また、絶えず継続的に土地が動く地すべりを慢性型地すべりといい、町内の各地で見られる。

二 地震と津波

地震は、地下の深いところで起きるもので、ここを震源という。その深さは、ふつう地表から、数キロから六〇キロぐらいのところである。も

第1編 自然

1749年 地震震央



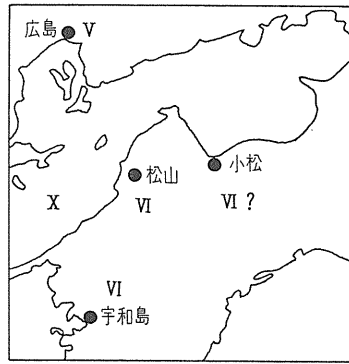
1769年 日向灘地震震央



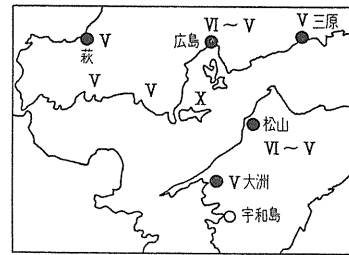
1812年 伊予灘地震震央図



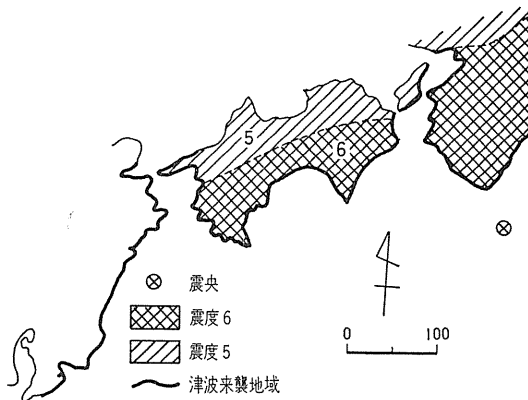
慶安2年地震震度分布 (宇佐美による)



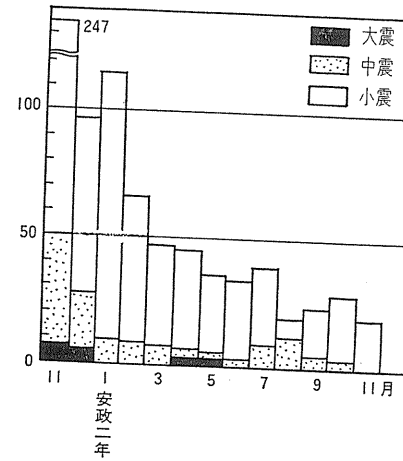
貞享3年安芸地震震度分布 (宇佐美による)



宝永地震の震度分布 (日本被害地震縦覧 宇佐美龍夫)

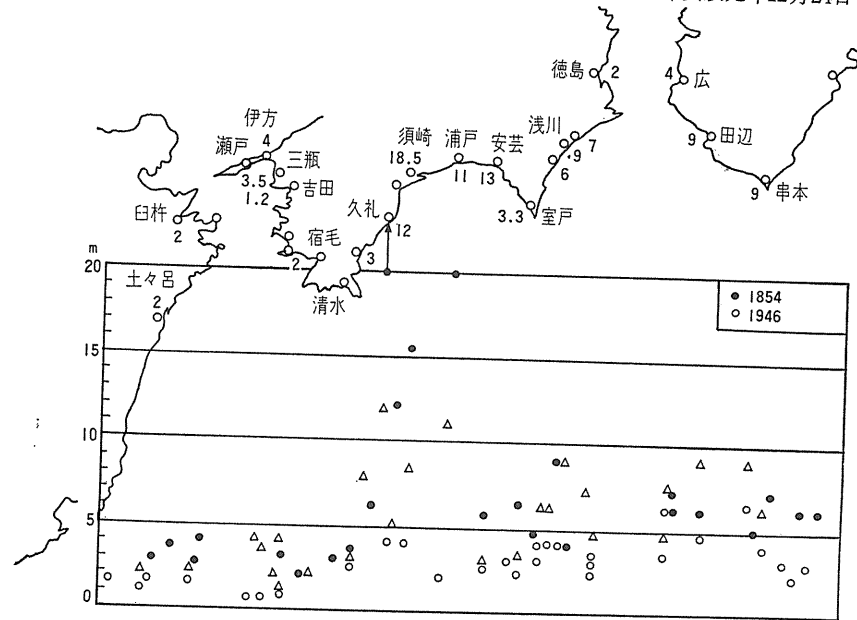


高知における月別余震回数 (宇佐美による)



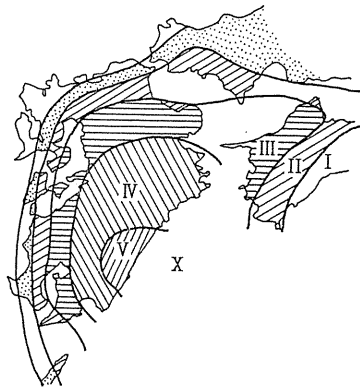
文政十二年から昭和四年まで、室戸岬付近でもっとも大きく沈降し、高知市付近ではやや隆起する傾向を表していた。一九四六年の南海大地震後、同じ水準点を計りなおしてみると、以前とは違って、室戸岬付近が最も隆起し、高知市付近では逆に沈降していることが判明した。このことから、四国南東部では、普通の時と地震の時、土地の運動が反対になる、シーソー

安政南海道津浪における各地の津浪の高さ (m) 下のグラフは安政津浪と1946年南海道津浪の波高分布比較 (宇佐美による) 1854年安政元年12月24日



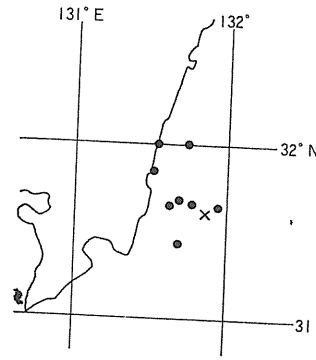
が用いられている。津波は長波であるので、海の深さの大きい所ほど、その伝播速度が大であり、太平洋（平均水深約四〇〇〇メートル）の深所で起こった津波の伝播速度は、毎秒二〇〇メートルになる。一九六〇年五月二三日のチリ地震津波は、一万七〇〇〇キロの太平洋を二三時間でわたって三陸海岸（岩手県）をおそい、人々をおどろかせた。このような津波が海岸に近づくと、急に波高をまして海岸上におし寄せ、大きな被害をもたらす。特にリアス式海岸のように海岸線の入りくんだ場所や、襟裳岬のようなつき出した場所で、この傾向が強い。この波高は、理論上、水深の四乗根と水路の幅の二乗根に反比例して増大する。たとえば、湾が津波のくる方向に向かってV字形に開いているとき、湾口の水深三〇メートル、幅一〇キロの場所で波高が一メートルあるとすれば、湾奥の水深三メートル幅一キロの場所では、波高が六メートルにもなる。しかし、外洋では、波高は数十センチから四〜五メートルまでで、沖合を航行中の船ではほとんど感知されない。日本で津波の被害の多いのは太平洋岸、特に三陸海岸であるが、これはこの地方の日本海溝付近にしばしば地震が発生することに関係する。しかし、津波の強さは必

1968年 日向灘地震震度分布
(気象庁による)



運動を行っていることがわかる。
一方、瀬戸町シタテ海岸南西方に展開する日向海盆は、幅八〇キロ、深さ一四〇〇〜二〇〇〇メートルにわたり、その形成は断層の変位によるものと考えられており、この周辺部には、マグニチュード六〜七級の地震が多発している。
津波は、海底地震や海底火山活動、海底地すべりなどによって引き起こされる、一〇〇〜二〇〇キロもの波長をもった波。一般には地震津波を津波といっている。日本の津波は有名で、世界的に Tsunami

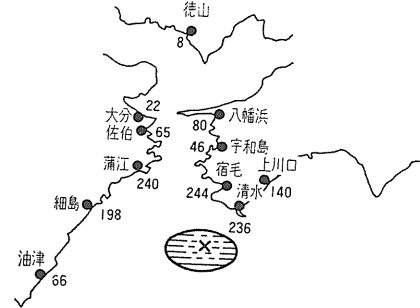
1961年 宮崎沖地震3月末までの主な余震分布 (気象庁による)



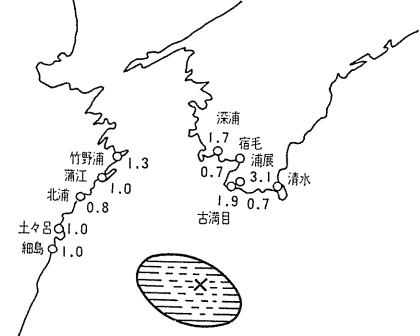
1961年 日向灘地震震度分布
(気象庁による)



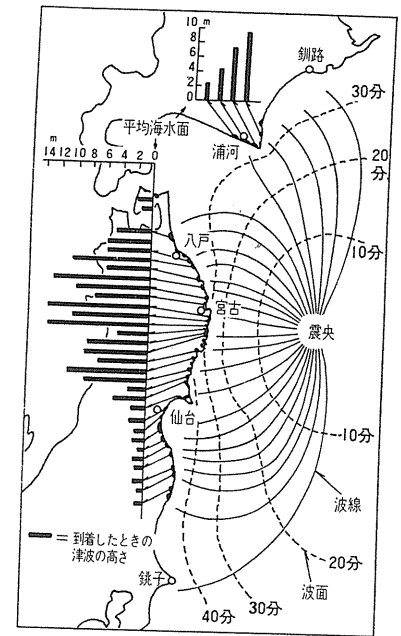
津波の最大振幅 (cm)
(梶浦ほかによる)



波源域と最大波のT.P.上の高さ (m)
(梶浦ほかによる: 1968)



津波



第1編 自然

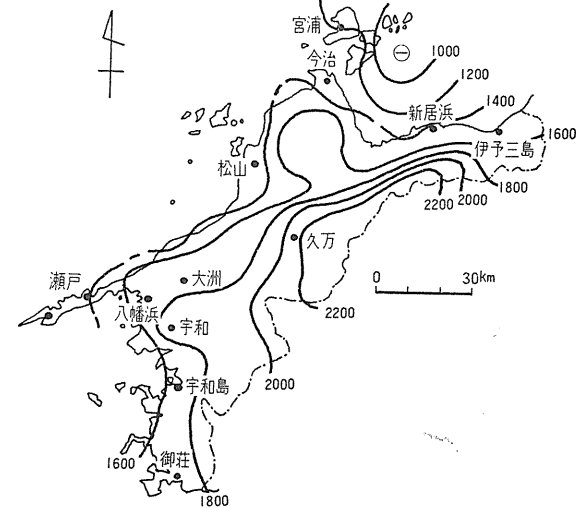
台風の発生回数には一〇〇四ミリアール程度の弱いものであるが、気象や海面の状態が台風の発達に
適していれば、発生後二〜三日で急速に発達し、一般には一日程度で最低気圧に達してしまう。その後台風は衰弱
台風の発生回数は図表のとおりで八月に最も多く、九月がこれにつぐ。
図表に示した台風の発生位置によると、北緯五〜三〇度、フィリピンの東、東経一七〇度ぐらまでの広い海面
上に発生しているが、夏には発生位置がやや北にかたより、それ以外の季節にはやや南にかたよる。なお、月別の
台風の発生回数は図表のとおりで八月に最も多く、九月がこれにつぐ。

線の中で発生するものが多い。
北太平洋の西部（南洋群島方面や南シナ海に発生する熱帯低気圧で、低気圧域内の最大風速が毎秒一七メートル
以上に達したものを台風という。我が国では毎年のように台風の来襲によって大きな損害（気象災害の一つ）をこ
うむるが、台風のもたらす多量の降雨によっていろいろな形で恩恵を受けている。このように台風は、我が国の国
民生活と密接な関係をもつため、日本の気象業務や気象学のなかで最も重要なものの一つとなっている。台風の発
生には、海面温度が摂氏二六〜二七度以上であることが必要条件とされているが、これはまた台風の発生には海面
から蒸発する水蒸気が大きな役割を果たすことを示している。よって、熱帯の海面に限られ、偏東風の谷や赤道前

三 台 風

津波は、地震に伴う急激な海底の地殻変動によって起こり、マグニチュード六・〇以下の地震ではほとんど発生
しないが、マグニチュード七・〇以上の強い地震になると、ほぼ一〇〇パーセントの発生率があるといわれてい
る。気象庁の資料によれば、慶長年間以降だけでも三六一回の津波があったという。

年降水量分布図 (mm) (深石原図)

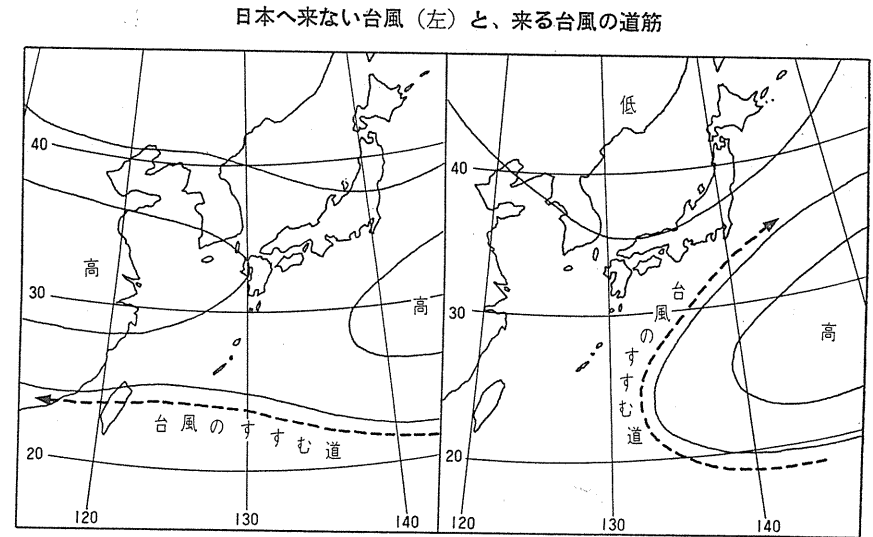


大きな被害のあった台風

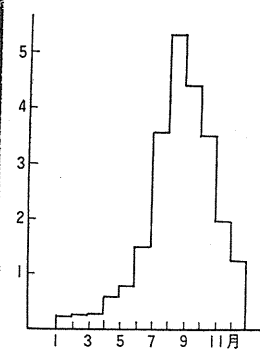
室戸台風	1934年9月21日	大阪湾に大きなひ害。死者2,700人、負傷者15,000人。
枕崎台風	1945.9.17	九州と中国地方に大雨。死者2,000人、負傷者2,300人。
阿久根台風	1945.10.10	九州に強風と大雨。死者730人、負傷者360人。
カスリーン台風	1947.9.14—15	利根川に大こう水。死者1,060人、負傷者1,750人。
アイオン台風	1948.9.16—17	関東・東北地方に大雨。死者500人、負傷者2,000人。
ジェーン台風	1950.9.3	大阪湾に高潮。死者340人、負傷者10,900人。
ルース台風	1951.10.15	九州・中国地方に強風と大雨。死者570人、負傷者2,640人。
13号台風	1953.9.25	東海地方で強風。死者280人、負傷者1,000人。
洞爺丸台風	1954.9.26	青函連らく船が沈ぼつ。死者1,360人、負傷者1,600人。
狩野川台風	1958.9.26	中部・関東地方に大雨。死者900人、負傷者1,100人。
伊勢湾台風	1959.9.26	九州をのぞく全国にひ害。死者4,759人、ゆくえ不明282人。
第2室戸台風	1961.9.16	近畿・北陸地方にひ害。死者200人。

台風が日本に上陸したか、又は近づいた回数 (30年間の合計)

月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
旬	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下
回数	2 1 4	5 7 11	12 9 14	10 18 6	9 7 2	1 1 1



台風の月別発生回数



レーダーでとらえた台風の目 (昭和40年8月の台風17号)

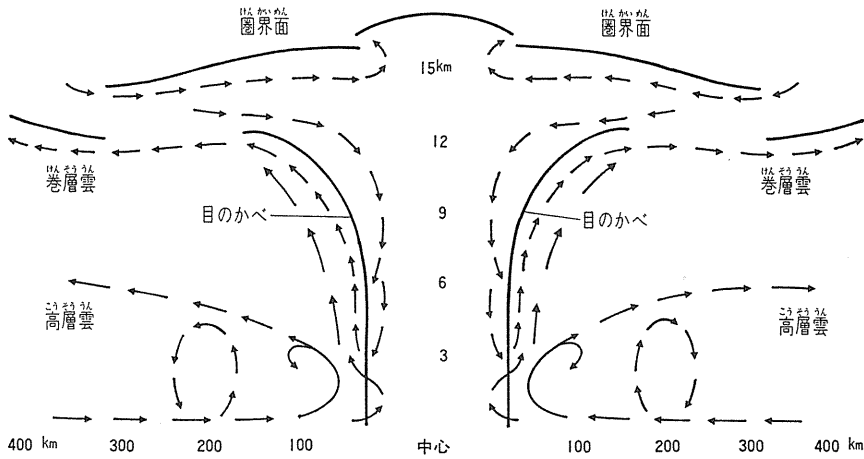
に向かうが、中程度まで発達した台風の寿命は、少なくとも一週間以上、寿命の長いものは二週間にも及ぶ。等圧線のみ方(気圧傾度)は、中心付近に近づくにつれて急激に強くなり、風もこれに対応して強くなる。しかし、中心のごく近くには「台風の目」といわれる所があって、そのなかでは比較的風が弱く雲も少ない。そのため台風の目のなかでは、時には日がさしたり星空が眺められることがある。台風の目の大きさは、台風によって異なるほか、同一の台風でも発達や衰弱の過程においてかなり変動する。台風の目の直径は四〇〜五〇キロくらいが普通であるが、一〇〇キロ

以上の大きさになることもあり、また、一〇キロ程度の小さなものであることもある。台風を中心付近は、猛烈な暴風雨になっている。海面付近の風や太平洋における波を正確に測定するのは困難であるが、最も強いものは秒速七〇メートル程度に達すると推定される。このため波は高くなり、うねりとなって非常な遠方にまで伝わる。波高の最大は十数メートルに達する。台風が陸地に近づくと、次のような場合に強い雨が降る。①台風の北上に伴って日本の南の海上に顕著な前線が形成されるとき、②台風のもたらす南又は東の風が斜面にふきつけるときである。台風の動きは発生直後は概して西に向かって進むが、その後、①そのまま西に進んでフィリピンや南シナ海方面に向かうもの、②途中で向きを変えて北又は北東に進んで日本をおそうもの、③途中で向きを変えるが日本の東へそれて陸地には影響しないものなどがある。またなかには、複雑な経路を示す逃走台風というものもある。逃走台風は七月と八月に多い。台風の移動する速さは台風が西進している間はそれほど速くなく、時速一五〜二〇キロ、一日の行程にして東京から名古屋、京都ぐらいの距離になる。しかし、台風が北東に向きを変えたあとでは、一般に時速四〇〜五〇キロくらいに進むが、ときには時速一〇〇キロという超スピードで進む場合もある。速度の大きい台風は、しばしば大きな被害をもたらす。大被害をもたらすのは九月の中旬か下旬に上陸するものに多い。台風による被害を大別すると、①強風による作物や建造物などの倒壊、②大雨による洪水やがけ崩れ、③高波による船舶の沈没や堤防の破壊、高潮による諸種の被害となる。これらのうち特に大被害をもたらすものは洪水と高潮である。

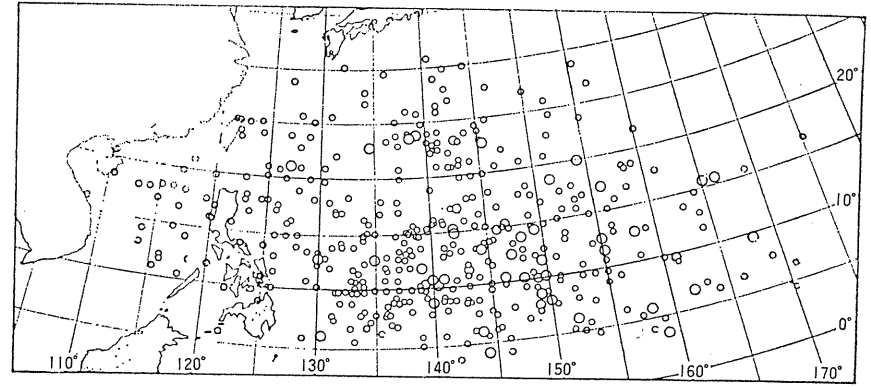
四 平安後期以後の地域の災害

瀬戸町の自然災害に関する詳細を古記録から見いだすことはできなかった。そのため、古記録、文献(県史地誌(総論)、八市誌、三瓶町誌、学研(現代新百科事典)、学習社(標準学習百科大事典⑦)、報告書、資料提供(町企

台風を中心ぶきんの気流のようす

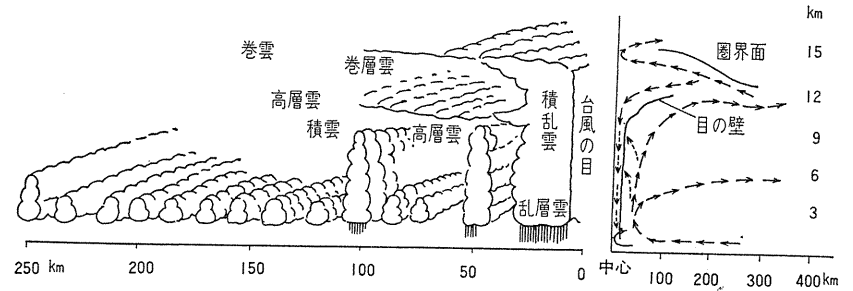


1941年～55年に台風が発生した場所 (大きいまるは強い台風)

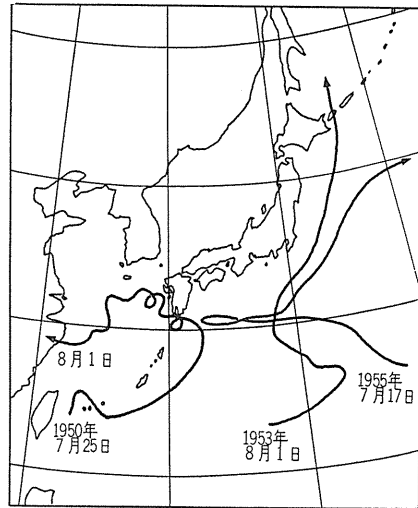


模式的構造図

中心付近の気流の様子



変わった進み方をする台風



る。
 正平十六年
 六月二十四
 日(一三六一
 年八月三日寅
 刻)、マグニ
 チュード八・
 四の南海道地
 震と、それに

伴う三メートルの津波が発生、畿内、南海道に大被害をもたらした。「参考太平洋記」によれば、「正平十六年六月十八日巳ノ刻ヨリ同十月ニ至ル迄、大地夥シク動テ、日々夜々ニ止時ナシ。山ハ崩テ谷ヲ埋メ、海ハ傾テ陸地ニ成シカバ、神社仏閣倒レ破レ、牛馬人民ノ死傷スル事、幾千万ト云数ヲ知ズ、総テ山川江河林野村落、比災ニ遭ズト云所ナシ。皇年代略記云、康安元年六月二十日大地震、其以後連続、金堂並南都堂舎已下顛倒、歴代皇紀又云、六月以後連々大地震、天皇寺金堂以下諸寺塔院多破損云々、後愚昧記云々、六月二十日酉刻大地震云々、中ニモ阿波ノ雪湊ハ現在

画課)などに記載された自然災害(地震、津波、台風、地すべり等)の文章の一部や個々の特徴的な被害を出した地域の記録を抜粋し、参考までに記載した。
 康和元年正月二十四日(一〇九九年二月二十二日)卯刻南海トラフに地震マグニチュード八・〇の地震発生。「後二条師通記」によれば、「興福寺昨日地震、西金堂柱小損、塔又破損云々」とあり、土佐では、「田千余町歩みな海に沈む」とある。当地域にも震度三〜四の揺れはあったはずである。古記録は見えていないが、南海道地震の特性から地震に伴う津波がマグニチュード三の津波が発生し、南海道太平洋岸を襲ったのであろうと推定されてい

の由岐ノト云浦ニハ、俄ニ大山ノ如ナル潮漲来テ、在家一千七百余宇悉引潮ニ連テ、海底ニ沈シカバ、家々ニ有所ノ僧俗男女、牛馬鶏犬、一ツモ残ラズ底ノミクズト成ニケリ。」と被害状況が著されてある。また同書に「七月二十四日ニハ、撰津国難波浦ノ湊数百町、半時計乾アガリテ、無量ノ魚ドモ沙ノ上ニ息ツキケル程ニ、傍ノ浦ノ海人共、網ヲ巻釣ヲ捨テ、我劣ジト拾ケル処ニ、又俄ニ大山ノ如クナル潮漲来テ、漫々タル海ニ成ニケレバ、数百人ノ海人共、一人モ生テ帰ルハ無リケリ、又阿波鳴戸俄ニ潮去テ陸ト成ル。」と、津波来襲状況が詳細に記録されている。徳島県経済部林務課編の「阿波海嘯誌略」には、「本震災に罹り死亡したる者六十余名を同村（現在の三岐田町）大池の東南イ谷に合葬、康暦二年供養の碑を造立し、康暦碑と称す。碑は県下に於ける古碑中著名のものなり」とある。津波銀座から遠い当町では、大きな被害がでたとは思えないが、他県の被害状況からみて、ある程度の海面上下動があり、海岸部では浸水があったかも知れない。

寛延二年四月十日（一七四九年五月二十五日）巳の下刻、瀬戸町三机周辺部を震源にマグニチュード七・〇の地震発生、宇和島城が破損し、そのほかにも被害が多く出た。「東宇和郡沿革史」「二年四月十日四ツ時、地大に震ふ。宇和島城楼破損、その他被害多し」（宇和島御記録抜書、則村手鏡、堀内文書）、「宮地日記」「十日晴、巳の下刻地震、頗る大地震也、西刻又地震」、「広島市史」「寛延二年三月朔日、広島濃霧あり、数十日に亘る。人々これを異とす、古老の日、是地震の兆なりと、四月十日果して地大に震ふ。是に至りて霧初めて晴る。」とある。

記述してきた康和元年は、平安時代（撰関（貴族）政治）の末期であり、正平十六年（南朝の年号）は南北時代で、北朝の年号は康安元年となっている。また寛延二年は、江戸時代後期に入り、九代將軍徳川家重の政権時代であった。このように大きく時代を切り離して記載したのは、その時代の感覚で自然災害の状況を理解していただければ幸であると思ったからである。

五 主な災害年代表

地震、津波については、大和（白鳳十三年）時代から昭和十六年までを簡略に記載した。台風、旱害については、本町の資料や他の資料を参考にして近年までの災害を記述した。

年 月 日	種 別	風 速	雨 量	概 要
		m/s	mm	
六八四・一・二九	地震			土佐その他、南海、東海、西海諸道津波
八八七・八・二六	津波			京阪中心、五畿内七道諸国大被害
一〇九九・二・二二	地震			土佐、南海道太平洋岸津波被害甚大
一三六九・八・三	地震			近畿、四国で被害甚大
一五九八・九・四	津波			津波、阿波雪湊で流失一七〇〇戸
一六〇五・二・三	津波			国東半島、別府、大分周辺津波死者多数
一六四九・三・一七	地震			西南日本、大風洪水と地震、豊後水道沿岸津波
一六六二・一〇・三一	地震			松山城、宇和島城石垣崩壊
一六八六・一・四	地震			日向一円壊家三八〇〇、周圀七里三五町の地没して海と化す
一七〇七・一〇・二八	地震			松山城破損、道後温泉湧出止む
一七四九・五・二五	地震			壊家多く、道後温泉黄濁
				宝永地震、家屋倒壊東海道ノ九州
				宇和島城楼破損

二六・	二八・	三三・	三三・	三三・	四〇・	四一・	四二・	四二・	三・	六・	七・	九・	一一・	一二・	一五・	
八・二五	八・二五	九・二〇	八・二四	二・一一	八・一〇	八・一〇	八・六	九・一四	一・二	二・四	七・二二	八・一五	四・一五	七・一一	八・	
大	台	台	台	大	豪	台	台	台	暴	大	台	台	台	豪	早	
旱	風	風	風	風	雪	雨	風	風	風	雨	風	風	風	雨	雨	
二〇	二一〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	四〇〇	一〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二二四	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	
六月二十四日まで降雨継続したが二十五日より八月四日まで四十一日間ほとんど雨量なし	南予地区水害、県下復旧費八万二〇〇〇円	南予地区被害多し	南予地区風力は弱かったが水害多し	宇和島一五センチ、宇和町二四センチ	南予短時間に強雨となり水害甚大	宇和島方面特に被害甚大、南予の漁民操業中、死者一名、重傷一二名	海上遭難者各地にあり	高潮による被害多く、南予地区に水害甚大	明治四十年二月十一日以来の大雨、県下に電灯、電話線切断不通箇所三〇か所に及ぶ	豊後水道を通ったので大災害を受けた、西宇和死者一、家屋全壊二、同半壊二九、床下二四二	南予地方特に雨量多く、大山津浪起り多数の死傷者を出す	宇和島測候所業務開始	河川の流出、堤防の決壊多し	七月八日より八月にかけて降雨なく農作物被害		

一七六九・	一八一二・	一八五四・	一八五七・	一八九九・	一九〇五・	一九三一・	一九四一・	明治六	一三・	一七・	一九・	二〇・	二三・	七・	九・				
八・二九	四・二一	二・二三	一〇・一二	一一・二五	六・二	一一・二	一一・一九	六	九・一五	八・二五	九・一〇	一〇・七	一・一	一一	一一				
地	地	地	地	地	地	地	地震	暴	大	台	台	台	台	豪	台				
震	震	津	津	津	津	津	波	風	風	風	風	風	風	雨	風				
五・一	一一五																		
宇和島で被害	松山被害多し	安政地震、東海、東山、南海諸道津波	安政地震、近畿以西全域	津波、房総、九州沿岸を襲う	大洲、吉田で壊家	今治、大洲、西条で被害多し	大分で家屋倒壊、二回連続	芸予地震、県内被害、死傷一七名、家屋五九六全壊	宮崎県内被害甚大	宇和島震度四、南予一帯に多少の被害有り	津波が日向灘沿岸を襲った	一月より五月まで雨なく六月三十日より七月七日まで暴風雨、諸川氾濫、被害多し	予讃両国に風水害あり惨状を極む	高潮あり、堤防決壊、溺死者五三人	風水害、諸所山崩、県下の死者八〇人、肱川氾濫す	四国、東海地方風雨強し	松山測候所創立観測開始	四日間の連続豪雨	九州南部を通過し、三崎(佐田岬)半島に上陸し、香川

昭和	二・五・八	霜	害	三〇〇	二〇〇〇	農作物特に桑に被害あり
	八・二九	台	風	一五〇〇	二〇〇〇	各地の防波堤崩壊、河川氾濫特に甚し
	六・一〇・一三	台	風	一〇〇〇	二〇〇〇	各地に風水害を受く、高潮による
	九・九・二二	室戸	台	二〇〇〇	二〇〇〇	室戸岬測候所最低気圧六八四で世界新記録、県下被害死者二八名、家屋全壊八五、同半壊七一戸、道路欠壊二八五、田畑九〇一町歩
	一〇・六・二六	霖	雨	四〇〇	四〇〇	特に南予地区が甚しく、県下死者四、家倒壊七、同浸水三六三、道路六九、田畑浸水二九三〇町歩
	一四・七	早	魃	二五・一	一九三	近年稀にみる早魃
	一六・一〇・一	台	風	二五・一	一九三	特に東予及南予地方に被害多し、道路五四ヶ所死傷者一二、行方不明七一、家屋全壊二一八戸
	一七・九・二二	台	風	一五〇	一五〇	死傷者一五名、家全半壊三四八戸、堤防決壊八一か所、田畑浸水八八八町歩、床下浸水五八七六戸
	一八・七・二二	台	風	四二・〇	二五〇	記録的暴風雨となり連続の降雨で諸川氾濫し大災害を受け惨状を極めた
	二〇・九・一七	枕崎	台	四二・〇	二五〇	松山気象台創立以来の最強風力、県下被害甚大なり
	二四・六・二二	デラ	台	四二・〇	二五〇	県下の総降水量は一〇〇〇〜二〇〇〇ミリであったが時速六〇キロの超速で接近して来たから沿岸地方には稀有の大災害を受けた。日振島漁民（漁船四八隻遭難）の惨事である。
	二六・七・二二	早	魃	四九・一	四九一	南予沿岸部では無降水二七日間を記録し相当の早害を受けた。

	一〇・一四	ルース	台	六八・九	四九一	我が国地上観測で最大のもので南予では風水害ともに甚しく、高潮による沿岸部の被害（大久地区の納屋数十戸全壊、半壊多数の災害を受ける）はかなり大きかった
	二七・七・二二	早	魃	二五・八	四九一	特に南予地区に水騒動が各所に起こった
	二八・七・二三	早	魃	二五・八	四九一	各地に畑作及び柑橘園に被害あり
	二九・一・二四	暴	風	二五・八	四九一	沿岸地区は満潮時に高波と高潮のためかなりの災害を受けた
	九・八	台	風	二五・四	五二	南予地区では雨量も少なく被害も軽微であった
	九・二六	台	風	二七・七	一〇五	風力が強く高潮による被害が重なり近來稀にみる大災害となった。青函連絡船洞爺丸沈没
	三〇・一〇・四	台	風	二四・四	一〇六	半島部、宇和海嶼部激浪のため相当の被害あり
	三一・九・一〇	台	風	二〇・四	一〇五	西宇和地区高潮による被害はあったが、やや軽少であった。
	三二・九・七	台	風	一四・五	一八八	中心が本県を通ったが風害よりも豪雨による被害が多かった
	三四・八・八	台	風	一五・五	七三三	最大の豪雨量
	九・二六	伊勢湾	台	一四・〇	二四〇	特に中部地方に被害甚大
	三六・九・一六	第二室戸	台	二八・〇	四九一	建物・耕地とも被害あるも詳細資料入手できず

四九・一・一	積雪	四五・一・一	落果、樹体等の被害あり
四〇・六	長雨と異常気象	四〇・六	被害状況不明
八・二一	台風九・一〇号	三〇・〇	住宅半壊五棟、道路二か所、床下浸水三棟、港湾一か所の被害軽傷三名、住宅半壊六、一部破損六七二
四六・八・五	台風一九号	三六八	床下浸水一五、文教施設一か所、倉庫二七棟
四七・六・六	梅雨前線豪雨	一六・三	道路二か所、船舶四隻、漁港七か所、海岸三か所
〃七・二五	台風九号	五四二	道路一か所、港湾一か所、海岸一〇か所
九・六	秋雨前線豪雨		道路一か所、がけ崩れ一〇か所、床下浸水四〇棟
〃一八	台風一〇号		被害状況不明
四八・五・七	豪雨		被害状況不明
七・二六	大雨		熱帯性気圧による大雨
四九・四・七	風浪と豪雨		いずれも被害状況不明
七・五	台風八号		道路一か所、漁港一か所
七・二五	梅雨前線豪雨		道路四二か所、河川七か所、がけ崩れ一八か所、橋梁二
九・一	台風一六号		か所、水道六か所、住宅〃床下浸水一〇二棟、田畑一五
九・九	台風一八号		

三八・一〃二	豪雪	三八・一〃二	樹木(特に柑木)の被害大なり
四〃六	長雨	四〃六	町内地すべり(海岸部)の被害あり
八・九	台風九号	一七・二	がけ崩れ、耕地被害あり
三九・九・二五	台風二〇号	三二・七	多少なりとも被害を受けていると思われるが、被害状況不明
四〇・九・一〇	台風二三号	二四・〇	
九・一七	台風二四号	二三・〇	
四一・七・一	大雨	四二・一	道路四か所、がけ崩れ一か所、倉庫半壊一棟
九・九	台風一九号		道路四か所、床上浸水一棟
九・一八	台風二一号		河川一か所
九・二五	台風二四号	一一・七	漁港二か所、畑流失一か所(〇・〇一ヘクタール)
四二・六〃九	旱魃	三五〇	被害状況不明
七・八	集中豪雨		被害状況不明
一〇・二七	大雨強風		道路五か所、港湾一か所、河川一か所
四三・八・二五	台風一〇号		被害状況不明
九・二四	台風一六号		道路一七か所、河川三か所、林業一か所
四四・六・二五	梅雨前線豪雨		農業用施設八か所
〃七・一〇			被害状況不明
八・〃一	旱害		被害状況不明

五〇・六・四	梅雨前線豪雨	ヘクタール文教施設四か所
一七・二五		道路一四か所、河川二か所、崖崩れ一か所、文教施設一か所
八・一七	台風五号	住宅全壊三棟、半壊四棟、一部破損八〇〇、床下浸水四、公共建物一〇、その他一〇〇、道路六か所、河川四か所、公営住宅二〇棟
五二・四・一四	豪雨	いずれも被害状況不明
八・二三	台風六号	
六・二三	豪雨と台風九号	道路八か所、河川六か所
七・二四	台風一・一二号	道路三か所
九・九	台風一七号	
六・一五	豪雨	
五二・八・二三	台風七号	
九・八	台風九号	
一・一七	豪雨	
五三・一・九	風浪	いずれも被害状況不明
六・一〇	台風三号	

八・二	台風八号	河川四か所、水路二か所、農道二か所
九・一五	台風一八号	河川一か所、海岸一か所
五四・六・二六	豪雨	道路三か所、河川一か所
七・四		がけ崩れ一か所
九・三	台風一三号	道路一六か所、河川二か所、農道三か所
五五・五・二一	集中豪雨	道路一か所
六・二		道路八か所、河川一か所、農道三か所、がけ崩れ一か所
七・二九		道路三か所
八・四		道路五か所、海岸三か所、床下浸水三四棟、倉庫損壊一棟
八・二六		漁港五か所、河川一か所、港湾二か所、漁港五か所、水産施設一か所
九・一一	台風一三号	農産物、特に柑橘類に被害あり
一〇・一四	台風一九号	港湾一か所
一・二七	積雪	道路八か所、河川二か所
五六・一・一〇	強風波浪	道路一五か所、水路一か所、農道三か所
六・二五	梅雨前線豪雨	
五七・七・一〇		

七・二三	梅雨前線豪雨
八・二七	台風一三号
九・二四	台風一九号
道路四か所、農地二ha、水路一か所	道路二か所、港湾四か所
河川一か所、道路一か所、漁港一か所	